

「血と骨」

2004(平成16)年11月6日鑑賞(道頓堀角座)

★★★★



監督=崔洋一/原作=梁石日/出演=ビートたけし/鈴木京香/新井浩文/田畑智子/オダギリジョー/松重豊/濱田マリ/中村優子/柏原収史/寺島進/國村隼/北村一輝/伊藤淳史/唯野未歩子/塩見三省/中村麻美(松竹、ザナドゥー配給/2004年日本映画/144分)

……前評判どおりのすごい迫力だが、ストーリー展開の中で権力者の末路の寂しさが十分予測できる。そして、本当にこんな男がいたのかと驚嘆させられる反面、なぜ自分の生き方を多少なりとも軌道修正できないのかと哀れに思えてしまう。昔、猪飼野地区と呼ばれた、現在の大阪市生野区いかいのの鶴橋駅、桃谷駅周辺は在日コリアンの聖地ともいべき地域だが、その雰囲気を見事に表現しているのはさすが崔洋一監督と感心！ 多くの日本人が真面目に観て、真剣に考え、議論したい映画だ。

これほど違う濟州島のイメージ

「ヨン様ブーム」が続く日本では、今「冬ソナ」を訪ねる韓国旅行が大人気となっている。そのため濟州島ツアーは少し押され気味……？ しかし、かつては(今でもそうだが)韓国旅行といえば、ソウルや釜山と並んで濟州島が大人気だった。とりわけ、ゴルフ熱が盛んで日本人がリッチだった1980年代から90年代にかけては、オジさんたちのゴルフ向け海外ツアーの1番人気は濟州島。もっともそれには、ゴルフ以外のプラスアルファの目的もついていたようだが……？

自由に海外旅行ができる時代となり、土地バブル時代を迎えた日本ではそんな濟州島のイメージが定着していたが、少し歴史を振り返って勉強すれば、濟州島は最も日本とりわけ大阪に近い島だった。

日露戦争終了(1905年)直後の1910年に締結された「韓国併合に関する条約」によって実現したのが、いわゆる「日韓併合」。これによって朝鮮半島には日本

の総督府がおかれ、以降1945年の日本敗戦に至るまで、朝鮮半島は大日本帝国による植民地支配が貫徹された。それは具体的には、神社参拝、日本式氏名、そして日本語使用のおしつけや志願兵制度の採用等であり、朝鮮民族を日本民族に同化させようという政策だった。そんな時代、濟州島は日本に1番近い島として、全人口の5人に1人が日本で生活していたとのことだ。濟州島と日本を結ぶ定期就航船「君が代丸」の存在や、大阪の猪飼野^{いかいの}地域が「小さな濟州島」と呼ばれたことなども、この映画を観てはじめて学ぶことができる。

濟州島のイメージの今昔はこれほど違うわけだが、日本人は決してこれらの過去の事実から目をそらしてはならないことはたしかだ。

大阪の猪飼野地域とは？

この映画の舞台はすべて生野区の猪飼野地域であり、主人公^{キム・ジュンピョン}俊平（ビートたけし）の家族が住んでいるのはその中の大成通り（今の千日前通り）の裏にある五軒長屋。パンフレットには、この映画のためにつくられた大掛りなオープンセットのことが詳しく書かれており、興味深いので、是非これを読んでもらいたい。木造2階建ての長屋だから、俊平^{ジュンピョン}が暴れて物を投げつけたり、木刀で家財道具をぶっ壊したり、果ては2階の階段から人間を下につき落とすのにも便利……？

『血と骨』の大阪は『ギャング・オブ・ニューヨーク』のニューヨーク

この映画はカラー作品だが、全編を通じてこんな長屋が舞台だから、ほとんど白黒映画に近いような色彩が特徴。唯一の例外は冒頭に登場する「君が代丸」のシーン。これは、濟州島と大阪を結ぶ定期便の甲板上に座った多くの朝鮮人たちが、「大阪が見えたぞ！」の声を聞いて一斉に、夢と希望に満ちた目で煙突から煙がもうもうと上がっている大阪のまちを見るシーン。

1906年生まれの俊平^{ジュンピョン}（伊藤淳史）が17歳の時にこの船に乗って日本にやってきたわけだが、その時の顔つきは、もちろん後日化け物のようになった俊平^{ジュンピョン}とは全然違うもの……。そして、このシーンだけは海も船も乗客もすべて明る輝いたもので、まさに濟州島から大阪への到着が希望に満ちあふれたものであった

ことがよくわかる美しいもの。

私がこのシーンを観て思い出したのは、『ギャング・オブ・ニューヨーク』（02年）での冒頭、「アメリカだ」と叫ぶ声にレオナルド・ディカプリオ扮するアムステルダムが「自由の女神」を見上げるシーン。このシーンでの、アイルランドから夢と希望を抱いて自由の国アメリカへ到着した姿と、『血と骨』の冒頭のシーンのイメージが全く同じものだということがよくわかる。なお、この冒頭のシーンはラストにも再登場するから、くれぐれもお見逃しのないように……。

何ともはまり役！

主人公の俊平^{ジュンピョン}は「化け物」としかいいようのない男。金への執着心はもちろんだが性欲も並はずれたもの。それはまだいいとしても、その化け物ぶりをもっとも発揮するのは凶暴性で、これは常軌を逸したものだし明らかに違法なもの。

現在の日本社会では、親が子にちょっとした暴力をふるっても大ゴトになるし、夫が妻にセックスを無理強いしても大ゴト！ 現在のそんな「基準」に照らせば、俊平^{ジュンピョン}の本家の息子、正雄^{ジョンウン}（新井浩文）やもう1人の息子、朴武^{パクム}（オダギリジョー）に対する暴力はすさまじいものだし、妻の英姫^{ヨンヒ}（鈴木京香）に対するセックス強要はまさに強姦そのもの……。もっとも食欲に関しては、いくら金儲けをしても贅沢に走るなどない様子で、うじ虫のへばりついた豚の生肉を平気で食べて精力をつけている（？）し、1人ぼっちになった後も、捨てられた野菜の葉っぱを集め、これを煮こんだものを食べている。

こんな伝説上の人物となっている俊平^{ジュンピョン}をビートたけしが演じているが、これは誰がみてもピッタリのはまり役！ なぜこんな凶暴でヤクザチックな役ばかりがハマリ役になるのかは、ビートたけしの顔つきを見れば明らかか……？ 私はそのことについて特にケチをつけるつもりはないが、1度はイメチェンして、善良なおジさん役も熱演してもらいたいものだが……？

俊平をめぐる3人の女たち その1英姫

俊平^{ジュンピョン}の本妻は英姫^{ヨンヒ}。幼い春美^{チュンミ}（唯野未歩子）を抱えて働いていた英姫^{ヨンヒ}を俊平^{ジュンピョン}が気に入り、力づくでモノにして結婚したのだから、なぜその後英姫^{ヨンヒ}に対してつ

らくあたっているのか、私にはよくわからない。

しかし、俊平ジュンピョンの、本妻英姫ヨンヒや本家(?)の子供たちに対する扱いはその後もずっと変わらず、ひどすぎるのひとこと。そうかといって、子供たちに対して愛情がないのかということではなく、長女花子ジョンウンが死んだ時は野獣のように荒れ狂うし、正雄ジョンウンが家を出ていった後も「俺の仕事を手伝え」と命令口調で迫っていく。多分これは、妻子はすべて自分の思いどおりに動くもので、自分の命令は絶対だという思考経路しか存在しないためだろうが、周りは迷惑なことこの上なし。そしてこれが俊平ジュンピョンの不幸はもちろん、一家の崩壊を招いていくことになったのだが、それはむしろ当然か……？

俊平ジュンピョンをめぐる3人の女たち その2 清子

俊平ジュンピョンが唯一やさしい愛情を注ぐのは山梨清子(中村優子)。清楚で純真そんな戦争未亡人の清子を自宅のすぐ前に新しく家を買って「困い者」にしたうえ、白昼堂々とセックスに励むのだから、家族や周囲の人たちがこれを嫌悪の目で見したのは当然。俊平ジュンピョンが家族や世間の目に動じないのは当然だが、やさしそうな清子も結構俊平ジュンピョンと肉体的好みやフィーリング(?)があっていたよう。だから後から考えれば、この変な関係がうまく続いていた時期が俊平ジュンピョンにとっても、また英姫ヨンヒやその家族にとってもベストの時期だったようだ。ところが、清子には子供ができなかったばかりか、脳腫瘍で倒れて動けなくなってしまったから大変……。その最後は……？

俊平ジュンピョンをめぐる3人の女たち その3 定子

もう1人の女鳥谷定子(濱田マリ)は、ほとんど動けず口もきけない状態となった清子ジュンピョンを俊平ジュンピョンが病院から引きとり、その世話をさせるために雇った女。ところが俊平ジュンピョンはこの定子ジュンピョンとも勤務初日からコトにおよび、結局定子ジュンピョンは俊平ジュンピョンの子供を4人ももうけることに。そして最後には俊平ジュンピョンは無理やりその長男の龍一(伊藤淳史ジュンピョン、俊平ジュンピョンの少年時代と二役)を連れて1人北朝鮮へ行くことに……。

この定子ジュンピョンは俊平ジュンピョンの財力や財産を目当てに入りこんできた悪い女(?)かもしれないが、その行動原理はよく理解できる。とりわけ、半身不随状態となった後

「盗んだ金を出せ！」と迫る俊平^{ジュンピョン}に対して、今や体力的条件が逆転している定子が逆に俊平^{ジュンピョン}の杖をとりあげて思い切り俊平^{ジュンピョン}の背中をうちつけ、「ああ、せいせいした！」と言うのを聞いていると「ごもっとも」と納得させられてしまう。

俊平^{ジュンピョン}もバカではないのだから、「ムチ」ばかりではなく「アメ」も適当に与えておかなければ、自分が年老いて身体が動かなくなった時、女たちから逆襲されるのでは、となぜ考えないのだろうかとは不思議に思うのだが。多分俊平^{ジュンピョン}は死ぬまで「俺はまだ大丈夫！」と思っていたのだろう。そう思うと、同じ男として俊平^{ジュンピョン}が哀れだが……。

飽きることのない2時間24分の大作

この映画は、長男正雄^{ジョンウン}のナレーションで俊平^{ジュンピョン}の若き日の時代が語られていく。したがって、1920年代から急速に進んでいった日本の軍国化、侵略化の流れについては足早にそれを追っていただく。実質的な物語のスタートは、1945年、日本が敗戦した後の朝鮮人長屋からで、この時俊平^{ジュンピョン}は39歳、正雄^{ジョンウン}は9歳という設定だ。以降この映画は俊平^{ジュンピョン}の生きザマを徹底的に追いかけていくため、2時間24分という大作となっているが、その迫力あるストーリー展開には決して飽きることがない。

映画の最後は1984年の冬。北朝鮮の中国国境近くの寒村で、俊平^{ジュンピョン}は龍一だけを傍においてさびしくこの世を去っていった。時に78歳。合掌……。

日本人必見の映画、そして勉強も不可欠

私がこの映画を観たのは公開初日の土曜日だったが、満席で立ち見が出るほどの大人気。観客層はさすがに年配の夫婦が多かったが、若いカップルもチラホラ。事前の宣伝効果もあるのだろうが、この手の映画がこのように多くの観客を呼んでいることに驚くとともにひと安心。なぜなら私は、こういう映画を多くの日本人に是非観てもらいたいと思っているから。

なおこの映画については、パンフレットの購入とその熟読をお勧めしたい。なぜなら俊平^{ジュンピョン}の生きザマを本当に理解するためには、その時代背景を勉強することが不可欠だから……。

2004(平成16)年11月9日記